



十二潟

じゅうにがた
ガイドブック

目次

- ◆ 十二潟ってどんなところ? 1
- ◆ おすすめコース 2
- ◆ 十二潟の生い立ちと地形 3
- ◆ 十二潟周辺の伝承と史跡 5
- ◆ 阿賀野川蛇行跡 7
- ◆ 十二潟と新江用水路 8
- ◆ 十二潟と昔の暮らし 9
- ◆ 十二潟の生きもの 11



十二潟ってどんなところ？

十二潟ガイドブックとは

豊かな自然環境を有する十二潟を将来にわたって守り伝えていくためには、多くの方々が十二潟を「地域の宝」として認識することが大切です。そこで十二潟とその周辺の散策を通じて、地域の良さを再発見してもらうことを目的にガイドブックを作成しました。

本ガイドブックは、新潟市の「地域が主役の里潟保全事業」として、新潟市里潟研究ネットワーク会議のメンバーが中心となって作成しました。

十二潟 概要

所在地：新潟市北区平林、十二、灰塚

面積：約 5.4ha

水面標高※：+ 1.6m

※ 水面標高は東京湾平均海面を基準とする

土地の所有形態：民有地

成因：河跡湖(三日月湖)
(阿賀野川旧河道)

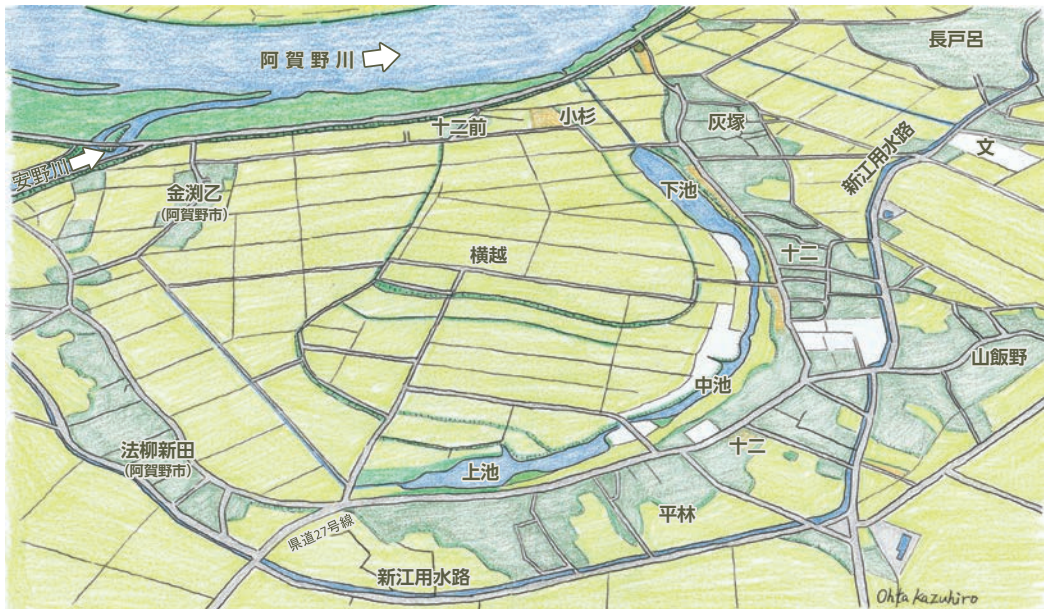
十二潟に関する
詳しい情報は
「潟のデジタル博物館」
をご覧ください。



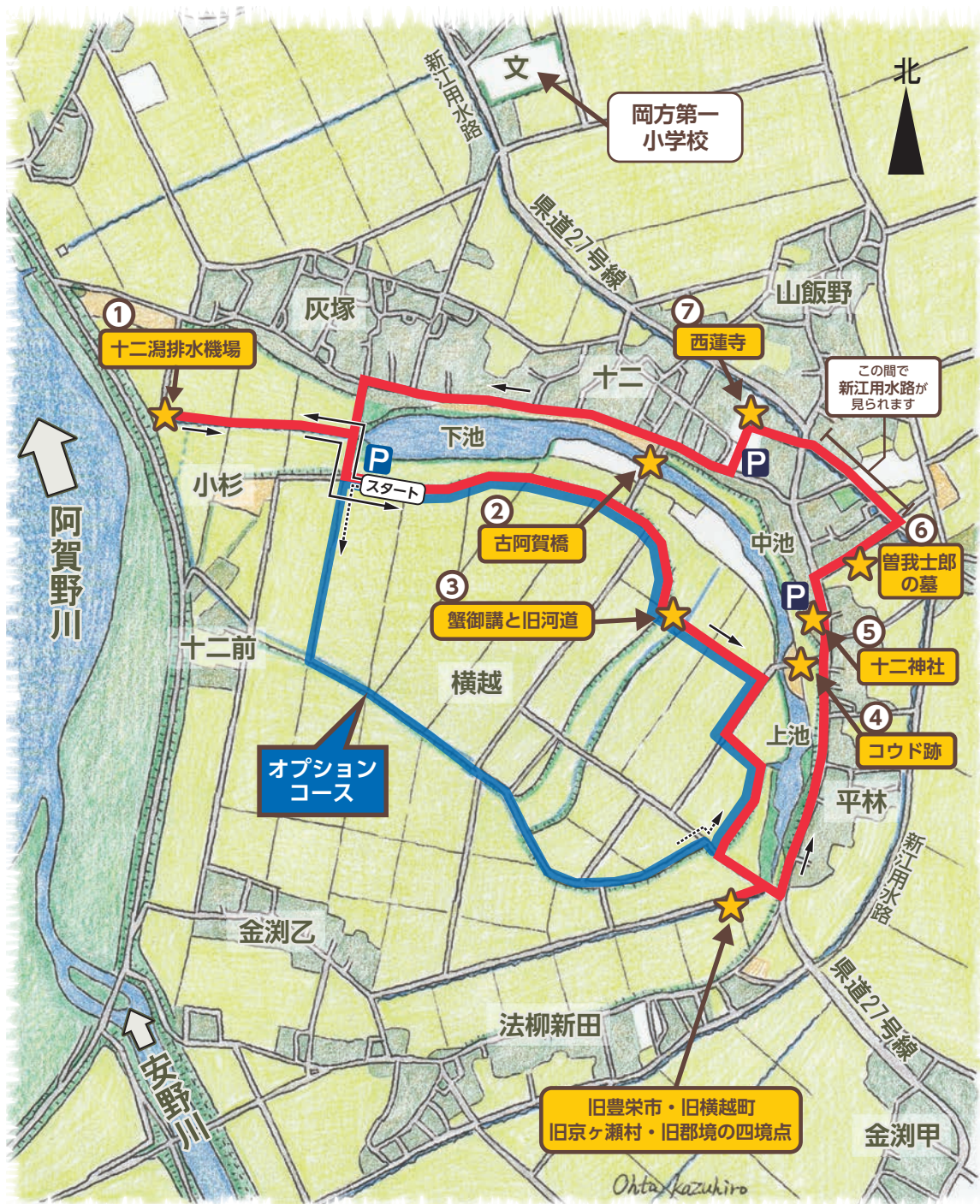
十二潟へのアクセス



十二潟 俯瞰図



おすすめコース



【凡例】

- : 基本コース
- : オプションコース

基本コースの所要時間 70 分 (全長 4.5km)、
 オプションコースを回った場合の所要時間 45 分 (全長 2.8km)
 ※地図上の番号①～⑦については 5、6 ページで紹介しています。

十二湯の生い立ちと地形

1. 阿賀野川の流路変遷

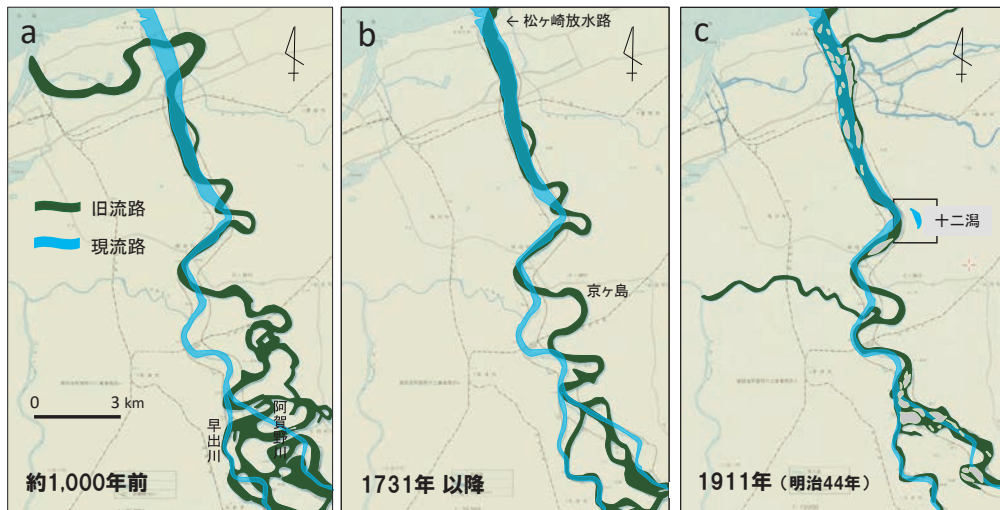


図1 阿賀野川の流路変遷

防災研 水害地形デジタルアーカイブ「阿賀野川」改変

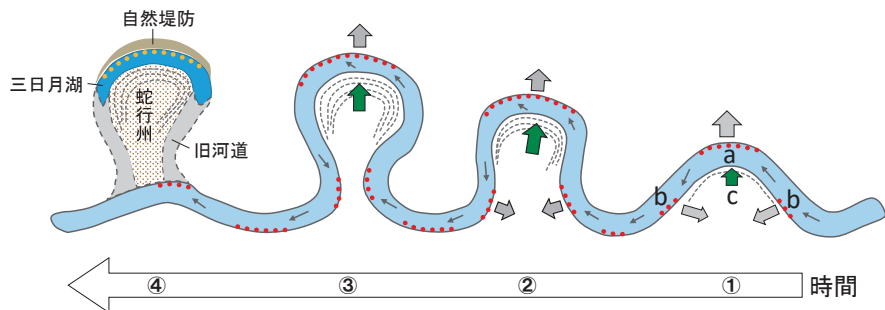
越後平野のような低平な平野を流れる河川は、あちこち流路を変えることが大きな特徴です。約1000年前(図1a)の流路にその様子がよく現れています。こうした流れは、江戸時代の1731年に生じた松ヶ崎堀割の堰の決壊によってかなり落ち着きますが、それでも京ヶ島付近や現在の十二湯に相当する所では大きな蛇行が生じていました。その後、河川改修が進み、明治44(1911)年にはほ

ぼ現在の流路に近づいています。

十二湯がいつできたのか、はっきりとしたことはわかりませんが、文政元(1818)年編纂の『越後輿地全図』には、十二湯のもととなった蛇行がすでに阿賀野川本流から切り離されて描かれています。このことから、少なくとも1818年頃には、十二湯は現在のような姿になっていたと考えられます。

2. 河川の蛇行と三日月湖の形成

図2
河川の蛇行と
三日月湖の形成



十二湯は、阿賀野川の蛇行によってできた三日月湖(あるいは河跡湖)と呼ばれる湖沼です。その形成には、図2に示したような流

路の変化があったと考えられます。小さな赤丸で示した流路の屈曲部は、他の部分よりも侵食力が強くなっています。そのためaの部

分は蛇行の振幅が大きくなるように、bの部分は上流側と下流側が次第に接近するように侵食が進みます。

一方、cの部分は蛇行の振幅が増すとともに砂礫が堆積して、緑の矢印方向に伸長していきます。そして③～④の段階に至って上下

流が連結して蛇行部は流路から切り離されます。こうして、特に河道が深く掘り込まれて淵となった蛇行の最奥部（④黄色丸）が三日月湖、島状に取り残された土地が蛇行州となります。さらに旧河道の外側に自然堤防が形成されます。

3. 十二瀧とその周辺の地形の特徴

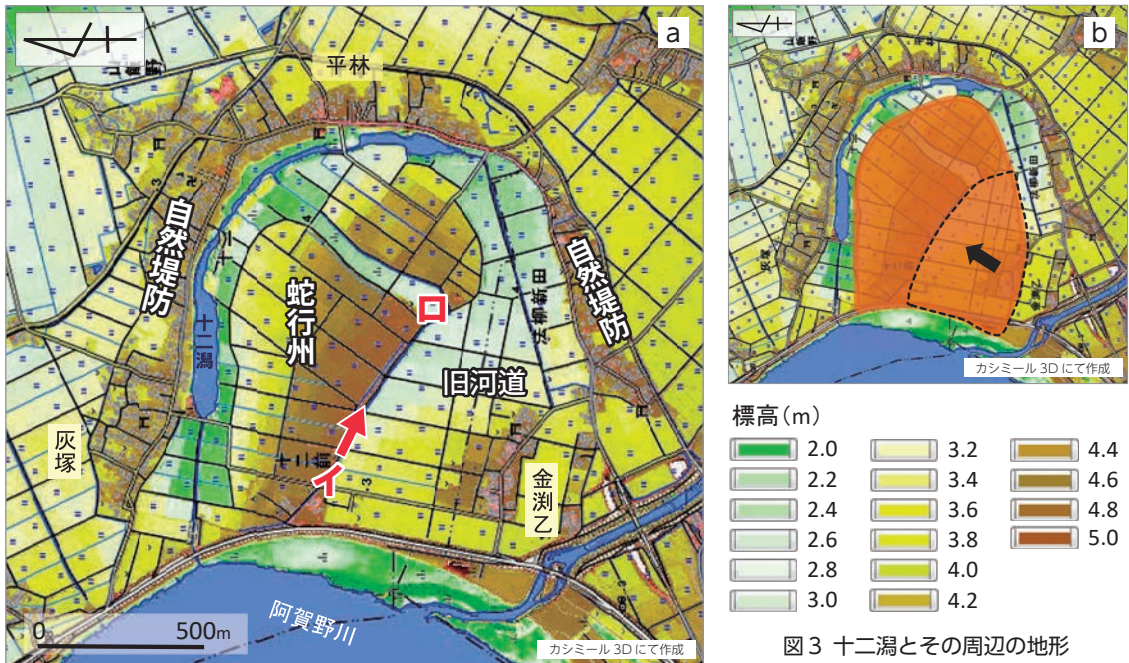


図3 十二瀧とその周辺の地形

図3aは十二瀧とその周辺の地形を示したものです。この図から十二瀧が図2のような過程を経て形成された三日月湖であることがよくわかります。蛇行部分の中央部には蛇行州が、その外縁には灰塚、平林などの集落がのる自然堤防が発達しています。ところで、この蛇行州は本来図3bに示したような形状だったと考えられます。しかし、その後、河道が矢印の方向（北側）に移動して破線の内側部分が侵食されたようです。そのことは、図3aの地点イから赤の矢印の方向をみると、蛇行州と旧河道との境界が高さ1.5mほどの崖となっていることでわかります（写真）。蟹御講の伝説となっている地点ロから十二瀧に向かう河道跡も、これと同時にできた可能性が高いとみられます。

阿賀野川や信濃川沿いには、弧を描くよう

な三日月湖がかつては複数存在していたはずですが、現在では十二瀧ひとつを残すのみです。阿賀野川の蛇行を示す地形学的にも極めて貴重な湖沼です。新潟市の自然遺産として長く保存していく必要があります。



写真 蛇行州と旧河道の境界の崖

十二瀧周辺の伝承と史跡

① 十二瀧排水機場

十二瀧からの排水とその周辺への農業用水を供給する
機場です。敷地内には、昭和 32 (1957) 年の「開田碑」
をはじめとした石碑が建てられています。



② 古阿賀橋

十二瀧では、対岸への移動には、綱を手繰りながら舟を移動させる
「綱舟」が使用されていました。しかし、綱舟は不安定だったため、昭
和 12 (1937) 年 7 月 27 日の夕刻に強風が吹いた際に、舟が転覆し
2 名の人々が亡くなりました。この事故を機として、翌年地元有志の協
力で橋が架けられ、地元の人たちは大いに喜びました。

その後、老朽化により昭和 29 (1954) 年に現在の農道となりました。



③ 蟹御講と旧河道

平林村に住む五左工門という悪人が、十二村の人々の善事や神仏を信仰す
るのを見て憤り、西蓮寺に恨みを持つようになりました。そこで五左工門は、
十二村の人々を困らせてやろうと考え、大きく弧を描くように流れていた阿
賀野川の流れを、直接西蓮寺にぶつかるように途中から変えて(右図の黄色矢印)、
寺を流してしまおうと考えました(10 ページ参照)。

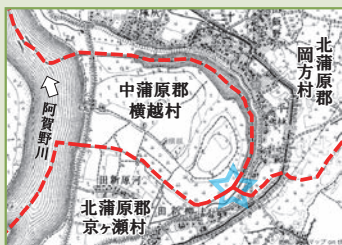
五左工門が変えたというこの流れは、実は阿賀野川の旧河道のことで(4 ペ
ージ参照)、2 ページの地図③の地点は、その出口にあたります。



コラム

十二瀧をめぐる市町村界の変遷

かつて、横越村は阿賀野川を越えて十二瀧の左岸まで張り出していました。明治 44 (1911) 年の
地図 (a) では十二瀧の南端部分(☆印の部分)が、横越、岡方、京ヶ瀬の 3 村で接していたことがわかり
ます。その後、昭和 30 (1955) 年に岡方村は豊栄町(旧豊栄市を経て現新潟市)に編入されますが、
一部が十二瀧を越えて横越町に食い込むなど、境界は複雑な形となっていました (b)。現在は、豊栄市
と横越町(一部)が新潟市北区、京ヶ瀬村が阿賀野市となり、境界も単純なものになりました (c)。



明治44 (1911) 年地図：スーパー地形より
明治44 (1911) 年の境界図 (a)



平成12 (2000) 年地図：スーパー地形より
平成12 (2000) 年の境界図 (b)



令和元 (2019) 年地図：スーパー地形より
令和元 (2019) 年の境界図 (c)

④ あとコウド跡

阿賀野川がこの地を流れていた頃から三日月湖となった後まで、対岸への移動は舟での行き来でした。その渡し場を「コウド」と呼びます。十二湯にもかつては、各家専用のコウドがありました。1950年代までの空中写真には、コウドの跡が写っています。



⑤ じゅう に じんじや十二神社

十二新田村の創村は承応元（1652）年といわれています。当社は『神社明細帳』によれば「北蒲原郡十二新田鎮守字内窪 無各社十二神社」とあります。

この地の大庄屋曾我新右衛門家が屋敷内に八幡宮を建立。天明3（1783）年には、屋敷内に諏訪神社が建てられましたが、その後十二神社に合祀。明治41（1908）年には同じく屋敷内にあった稲荷神社を合祀。八幡宮・諏訪神社・稲荷神社はかつて、曾我家の屋敷神であったと思われます。なお、当社は曾我家の屋敷跡に建っています。



⑥ そ が しろう はか曾我士郎の墓

この一角には、曾我日新や曾我士郎など曾我家の墓があります。曾我家は江戸時代、代々この地を拠点とした岡方組48ヶ村の大庄屋（割元・肝煎）です。曾我新右衛門家の墓は西蓮寺にもあります。

曾我士郎は、幕末勤王の志士で、名は佑信、通称長左衛門といいます。坂井経堂の門に入り塾頭を務め、私財を投じて講武場を開きました。

北越戊辰戦争では、各村の名主や農民を集めて岡方正気隊（3番隊）を組織し、新発田藩の統制下に属して赤谷・庄内・米沢・会津などを転戦しました。関川村の近郷での戦いでは、地元の庄屋である渡邊家が米沢藩の陣屋であり、曾我家は渡邊家と親戚にあたることから、岡方正気隊長として「石川士郎」または「曾我長左衛門」と変名を使用しました。

平定後は帰村し、村政や県に奉職し、明治23（1890）年に東京で亡くなりました。



⑦ さいれん じ西蓮寺

真宗大谷派、山号は松聲山。開山・開基は斎藤兼智です。加賀国（石川県）白山で神職だった斎藤権之頭が蓮如に帰依して法名兼智を賜りました。元和9（1623）年、当地に第10世佑玄和尚が一字を再興し、正保2（1648）年に本堂を建立。明治11～14年に本堂を大改修し、明治15（1882）年に現在の大伽藍となりました。本堂内の天井絵は、江戸時代の画家北海醉道人（長戸呂村出身）によるものです。なお北海醉道人の碑は、長戸呂の長安寺にあります。

